

広報学への接近Ⅱ

広報学検討研究会報告書

1999年9月

日本広報学会 広報学検討研究会

はじめに

本報告書は広報学検討研究会の2年目の報告書である。1年目の中間報告書（『広報学への接近』）では研究会メンバーがそれぞれの視点で広報学への思いや仮説を提案したが、2年目の活動は「広報学仮説」の提案に挑戦した。

途中、果して「広報学」という取り組みは可能なのか、という意見もいただいたが、日本広報学会という以上は、広報学をどう考えるかを明確にすることは避けては通れない課題である。それに前回も書いたが、日々行われている膨大な「広報活動」の重要性を考えると、そこでの蓄積を何らかの形で客観化し、知の体系として構築する枠組みを作っておく価値は大いにある。

もちろん当初から1年や2年で結論が見出せるようなテーマでないことは参加者も十分承知しているものの、ともかく誰かが一歩踏み出せなければならないという思いから、今回は具体的に「広報学」のテキストづくりをイメージしながら議論を進めることにした。

広報学についてはあまりに多義的であることと「学」としての捉え方の問題もあって、議論するよりも、むしろ個人研究を中心として、その成果を持ち寄った議論にしたいと思っていたが、なかなか思うようには進まず、結果としては前回と同じく中間報告書的なものになってしまった。これは一重に主査の責任である。

今回の主軸は君島論文『「広報学」の体系化と定義への試み』と和田論文『広報学の定義と体系化のための一考察』である。研究会全員の総意ではないが、研究会の議論も踏まえながら私論的試論を展開してもらった。いずれも、これから「広報学」を議論していく上でのたたき台になるものと確信している。合

わせて、広報学を議論していく上でのいくつかの視点をまとめた論文を6編採録した。

研究会参加者の思いは、この報告書が広報学への関心を高め、理論と実践を統合した広報学の基本テキストの実現につながっていくことである。日本の社会科学、特に経営学の分野では、「学の基本となるテキスト」への関心が低く、そのために折角の研究や実践の成果が社会的に蓄積されにくい状況にある。この報告書がきっかけとなり、広報学の基本テキストづくりの動きが出てくることを念願している。

広報学検討研究会主査
佐藤 修

目次

第1部 広報学の構築に向けて

- 「広報学」の体系化と定義への試み／君島邦雄 …………… 4
- 広報学の定義と体系化のための一考察／和田仁 …………… 16

第2部 「広報学」を考えるもうひとつの視点

- 広報学の体系－試案として／猪狩誠也 …………… 30
- 広報学仮説構築に向けてのひとつの視点／佐藤修 …………… 33
- 広報マネジメント／小林貞夫 …………… 40
- I Rの観点から「Relations」を考える／遠藤彰郎 …………… 45
- 広報機能の中の同意形成について／中村豊 …………… 51
- 広報学について／寺門正之 …………… 54

研究会メンバー

猪狩 誠也	東京経済大学コミュニケーション学部
植竹 政次	山九株式会社組織活性推進部
上野 征洋	株式会社コミュニケーション科学研究所
遠藤 彰郎	國学院大学経済学部
大森みつえ	株式会社カイト国際部
大和田順子	株式会社イオンフォレストコミュニケーション部
金澤 活	株式会社カフアドハウス
君島 邦雄	テルモ株式会社広報室
剣持 隆	現代広報研究所
小林 貞夫	愛知学院大学大学院経営学研究科
佐藤 修	株式会社コンセプトワークショップ
新海 貴弘	神奈川大学大学院経営学研究科博士過程
寺門 正之	株式会社東急エージェンシーPR部
中村 豊	東陶機器株式会社広報部
谷中健太郎	三井不動産販売株式会社広報室
彌吉 昌裕	PR COMM, INC.
山田 貞儀	千代田化工建設株式会社広報・渉外部
山田 達雄	日本広報学会事務局長
和田 仁	株式会社電通第四マーケティング・プロモーション局

*所属は原則として当時の所属